

# 明治期祇園祭山伏山の装飾と 菊水鉾町の寄進

竹中 友里代

山伏山は、元治元年(1864)の蛤御門の変による市中大火の節も土蔵は燦然と形が残り、祭りの諸道具の紛失はひとつもなしと『神事器具録』<sup>1</sup>は記す。しかし実際は、胴組と一部懸装品に被害があり、明治2年(1869)胴組ができて、この年より巡行が復活したと松田元の『祇園祭細見』<sup>2</sup>はいう。元治元年の大火で被災した南隣の菊水鉾町から、明治24年(1891)7月に見送りや水引などが寄進された。見送りは中国明代の刺繍雲龍図で、天保12年(1841)に完成するまで20年の歳月を費やし細工された優品であった。

山伏山町文書の箱4には領収書などがまとめられた封筒2点がある。「前講書類入」(4-45)と表書のある封筒には、菊水鉾町から寄進された懸装品などの目録・謝礼金の受取等4点が包紙で一括されていた。菊水鉾町総代森善之助・上尾徳兵衛から、文化11年(1814)制作の裾金物(裏表紙参照)も合わせて、龍の模様の見送りの目録(史料翻刻⑩)が7月26日付けで出され、前掛・水引等8点の寄附品目録(史料翻刻⑪)とそれらに対して山伏山町からは、400円の謝礼金が支払われ、翌日27日の受取(史料翻刻⑫)には1銭の証券印紙(収入印紙)が4枚貼付されている。明治の物価との比較は難しいが、機織職の1ヶ月の手間賃が3円から5円とすると、400円は、現在の数百万円から一千万円程にもなるか。また同時に祭りの巡行では真松の枝に飾る懸守も10円の謝礼金で山伏山へ譲渡された(史料翻刻⑬)。貴重品の対価に山伏山町の誠意として支払われたのであった<sup>3</sup>。

この封筒には、明治24年9月、寺本勘助から出された欄縁や見送り掛などの鍔金具の新調見積書があり、総計616円を算出している。もう一つの封筒(4-44)には、祇園祭関係の領収書がまとまっている。そこには同24年から26年にかけて寺本勘助からの代金受取8点が含まれる。七條新町東入の金物細工師寺本勘助により見送り掛を飾る11羽の鶴図や雲図(図1)・新欄縁鶴図(図2)をはじめ見送上縁菊花文などの鍔金具が新調された<sup>4</sup>。さらに同24年8月この時の雲・鶴の欄縁金具の下絵に対する謝礼金5円の受取がある。日本画家として「明治大正期書画家番付」<sup>5</sup>にも名を載せる八木雲溪(1833～1892)が山伏山の鍔金具の図案を描いたことがわかる(図3)。雲溪は、八木奇峰の子で、明治6年御所仙洞院で開催された京都博覧会の席画を行い、同12年京都府画学校の代用教員に任命されている。雲溪は下絵を描いた翌25年6月に59歳で逝去している。

この封筒には同24・5年の塗師大橋庄兵衛の受取7点があり、欄縁や長柄等の漆塗りが行われている。大橋庄兵衛は、同23・4年の京都博覧会<sup>6</sup>では漆器の審査員の一人で、大正5年(1916)53才で亡くなるまで、京都漆工芸品の重鎮であった。その他に檜大長柄・角柱や見送りつり用の眞田紐・毛氈等の道具類や会合での諸経費の領収書が多数ある。譲り受けた懸装品に見合うように、山の装飾と

改変が加えられていた。

この事業費については、同 24 年 8 月 28 日付けの「御山修繕有志記名録」がある。そこには、内藤源助 250 円・熊谷佐兵衛 150 円はじめ町内 30 人からの寄付金が一覧され、合計 1281 円が集まっている。また年紀はないが、おそらく同時期と考えられる積立講の規約がある。毎月 1 円を 36 回、3 年間掛けて、その後は抽籤で分配金を講員に渡し、利息を積立て修復に宛てる。今井たつ・松居庄七等 25 名の掛金支払い帳が残る。明治期の山伏山再興事業は、町を上げて取り組まれたのであった。

#### 【注】

- 1 山伏山町文書 引出 2-155、「山伏山町神事器具録」(公益財団法人祇園祭山鉾連合会編『祇園祭山鉾銚金具調査報告書』I、2016 年、170 頁)
- 2 松田元『祇園祭細見』山伏山、1977 年、100 頁
- 3 若原史明『祇園会山鉾大鑑』1982 年では、「譲受品の目録」を掲載し、菊水鉾町から譲受に至った経過や有償か無償か、折衝の様子など不明であるとし、前掲注 2 でも目録を掲げ、両町の親密な関係を述べている。
- 4 前掲注 1、「第 2 章 各町山鉾の銚金具 5 節山伏山」79～92 頁
- 5 八木雲溪は、日本画家八木奇(寄)峰の子で、山伏山の新欄縁(雁)刻銘にも画工としてその名を刻む。  
東京文化財研究所 書画人物データベース  
[https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke\\_name/792901.html](https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke_name/792901.html)  
八木寄峰(1806～1876)は、『平安人物志』の嘉永 5 年版では京の新町三条南、慶応 3 年版では衣棚御池南に住む画家である。八幡山の鶴図などの銚金具の下絵を描き、金具などの細工人の筆頭にありコーディネーター的な存在であったという(前掲注 1『報告書』Ⅲ、「第 2 章各町山鉾の銚金具 10 節八幡山」、2018 年、145 頁)、長浜市長浜城歴史博物館『八木奇峰と二人の師匠』2009 年
- 6 京都府立京都学・歴彩館 京の記憶アーカイブ、大橋庄兵衛年表、明治 23 年 4 月 3 日・明治 24 年 4 月 1 日

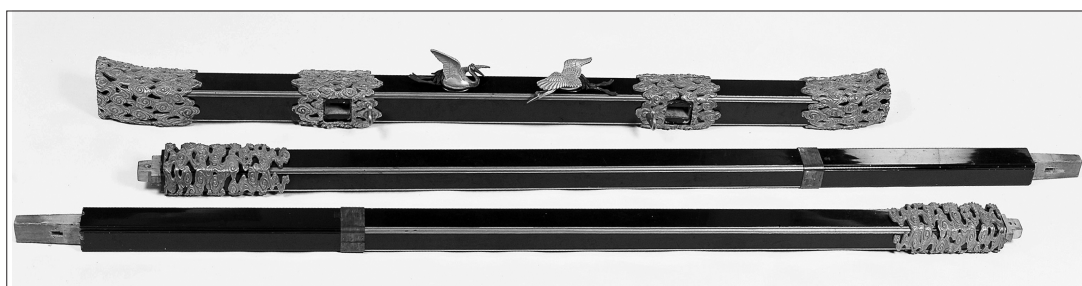


図 1 見送掛雲・鶴図銚金具

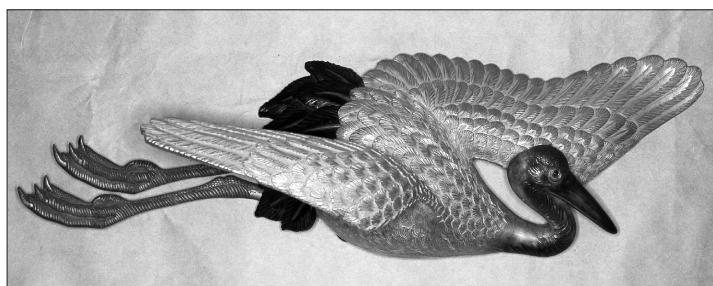


図 2 新欄縁 鶴図銚金具



図 3 八木雲溪像